
ソーセージ

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ソーセージ

【Nコード】

N65350

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

ドイツ料理を営む夫婦。二人が店の看板メニューのソーセージを研究しているうちに辿り着いた面白いソーセージとは。最後までちよっとどんでん返しがあります。

第一章

ソーセージ

井振欣也はだ。自分の店のキッチンで難しい顔をしていた。そのうえで、である。横にいる妻の美代子に対して言った。

「なあ」

「いきなりどうしたのよ」

「うちの人気メニューはソーセージだよな」

二人の店はドイツ料理のレストランである。日本では少し珍しい。しかし味がよくサービスも丁寧で値段も安いということと客は多い。そしてドイツ料理といえばやはりソーセージだ。欣也はそれをお話に出してきたのだ。

「そうだよな」

「ええ、それがどうかしたの？」

「ソーセージっていつでも色々あるよな」

彼はまた言った。

「豚のソーセージだけじゃなくて」

「牛や羊もあるわよね」

「鶏もあるな。色々だよな」

「そうね。中に大蒜や玉葱も入れたり」

「本当に色々ある」

彼は腕を組んだまま述べる。

「何かとな」

「けれどそれがどうかしたの？」

「いや、それだけか？」

不意にこんなことを言い出したのである。

「挽肉や玉葱とかを入れてそれで終わりか？」

「どういうこと？それって」

「ソーセージに入れていいのはそれだけか？そういったものだけを

腸の中に入れて燻製にして茹でたり焼いてそれで終わりなのか？」

「それがソーセージじゃないの？」

美代子は夫の言葉の意味がわからなかった。この店ではソーセージは自家製である。その独特の味も人気を集めているのである。

「それが」

「だから他にないか？」

しかし彼は言うのだった。

「他にないか？」

「ええと。他にあるのかしら」

「今それを考えているんだ」

そうだとしたのであった。

「何かないかってな」

「そうね。新しい料理の開拓ね」

「ああ。ソーセージにベーコンにハムにジャガイモ」

ドイツ料理の基本である。

「それにハンバーグとザワークラフトとアイスバインな」

「ドイツ料理ね」

「それとビールにワインだ」

酒の話もする。

「皆ドイツ料理っていったらそういうものだよな」

「けれど他にもあるかもってことね」

「ああ、そうだ」

まさにその通りだというのだ。

「あるんじゃないのか？他にも」

「そうね。それでソーセージについても」

「何かある、絶対にある」

欣也はまた言った。

「俺達で新しいソーセージを考えてみないな」

「わかったわ。じゃあやってみましょう」

美代子も夫のこの言葉に頷いた。

「それじゃあね」

「やってみるか。作ってみるか」

「よし、それだったら」

「ソーセージに色々入れてみましょう」

具体的にはこういうことだった。

「何でもね」

「そうしてみるか。じゃあやってみるぞ」

「ええ、そうしましょう」

こう話してだ。そのうえで二人で新しいソーセージを作りはじめたのだ。だがそれはまさに迷走と悪戦苦闘の日々のはじまりであった。

最初にやってみたのはだ。魚だった。しかしこれは。

「ううん」

「何か違うわね」

「そうだな」

食べてみてだ。二人の顔ははっきりしないものになった。

第二章

「何か違うわよね」

「これはこれでいけるかも知れないがな」

「ええ、新しい味じゃないわね」

「これじゃあ普通に魚肉ソーセージに思われるな」

欣也は茹でられたそれをフォークで取って食べながらだ。そのうえで言うのだった。

「あまりよくないな」

「そうね。これは没ね」

「ああ、止めておこう」

魚のソーセージは斬新さと違和感から没になった。そして次はだ。牛や豚をミックスしてみた。羊や鶏もだ。そうして作ると。

「変わらないな」

「っていうか普通にお店で売っているものよね」

「ああ、それと同じだな」

「そうね」

こう二人で言い合う。食べてみるとまさにそうだった。

「これじゃあな。何も変わらないな」

「新しいソーセージでも何でもないし」

「やっぱり駄目か」

「ええ、残念だけれど」

こうしてミックスも駄目だった。そしてだ。

欣也はここで他の国の料理にも目を向けた。その見たものは。

美代子の前に出すとだ。彼女はまずその目を点にさせてから言った。

「これドイツ料理？」

「いや、違う」

すぐにこう断った。

「スコットランド料理だよ」

「つまりイギリスね」

「その料理だけねどな」

「それで料理の名前は？」

「ハギスな」

それだというのだ。見れば何か内臓の中にだ。挽肉やら野菜やらが詰められている。それを見れば僅かにソーセージに見えなくもない。

「それだよ」

「ハギスね。美味しいの？」

「さてな。作ってはみたけれどな」

それはわからないというのである。

「どうなのかな」

「全部食べてからわかるのね」

「レシピ通りには作ってみた」

そうしたというのである。

「食べてみてそれでヒントか何かにしよう」

「そうね。それじゃあ」

こうして二人で食べてみる。美代子はまず一口食べてみた。そうしてそれから述べた感想は一体どういったものかというのであった。

「まずいわね」

「まずいか」

「ええ、まずいわ」

そうだというのだった。

「食べてみるといいわ」

「そうか。それじゃあ」

妻に促されて彼も実際に食べてみた。その感想は。

「どう？」

「まずいな」

彼もこう言った。

「これはかなりな」

「そう思っつわよね、やっぱり」

「ああ、まずい」

また言った。

「はつきり言っつて店には出せない」

「そうよね。スコットランドの料理よね」

「郷土料理な」

「向こうの人はこんなものを食べてるの？」

「イギリスの料理はまずいとは聞いているけれどな」

「それでもここまでまずいと」

典子もかなり言う。言わずにはいられなかった。

第三章

「どうしようもないわね」

「ああ。しかしな」

「しかし？」

「結構何でも詰め込めるんだな」

ハギスの中にあるものを見ての言葉だった。挽肉だけでなく野菜や香草まで入れられている。本当に色々と入れられてはいる。

「そうなんだな」

「そうね。お肉や玉葱とかだけじゃなくてね」

「色々入れられるな。そうだな」

「どうしたの？」

「思い切ってみるか？」

「こう言うのだった。」

「ここはな」

「思い切ってって」

「ああ、誰も考えなかったものを入れてみないか？」

欣也は意を決した顔になっていた。

「何でもやってみないとな」

「そうね。何でもっていうけれど」

「とにかくやってみるぞ」

彼は言った。そうしてであった。

欣也と典子はとにかく色々なものをソーセージに入れ続けた。そしてある日だった。欣也は彼としては思い切ったものを入れたのだ。つた。

それはやたらと赤いソーセージだった。茹でられている。典子は白い皿の上のその赤いソーセージを見てだ。夫に対して問うた。

「何、これ」

「血を入れてみた」

そうだと答える欣也だった。

「血をな」

「血!？」

「ああ、牛の血だ」

それだというのである。

「それをソーセージに入れてみたんだけれどな」

「ソーセージにそんなもの入れるの？」

「普通は考えないよな」

「ええ」

「けれどな。これはどうかって思ってな」

「それで入れたのね」

夫のその考えをここで理解したのだった。

「とにかく何でもやってみるってことで」

「そういうことなのね。それじゃあ」

「食べてみるか」

彼もテーブルに着いてだ。そのうえで妻に対して言った。

「それじゃあこのソーセージをな」

「そうね。まずは食べてみないとね」

「何もわからないからな」

何につけてもそうであった。そうして実際に食べてみるのだった。

フォークで突き刺す。しかし血は出ない。典子はそれを見て欣也

に対して言った。

「血が固まっているの」

「ああ、血漿でな」

「成程ね。それでなの」

「うん、それでなんだ」

まさにそれだと言う。

「固まっているのは」

「血がどくどくって出て来るかしらって思ったけれど」

「流石にそういうソーセージはお客さんが気持ち悪く思うだろう?」

「それでこうした風になのね」

「血つていつても色々だからな」

さらさらとしたものだったり固いものだったりする。欣也がこころで使ったのはその血漿により固まる血の方であったのである。

「それでそれも考えたんだ」

「色々考えたのね」

「ああ、それで味はどうだ？」

「食べるように促す。」

「食べてみてくれよ」

「ええ、それじゃあ」

夫の言葉に応えて食べてみる。するとであった。

第四章

「どうだい？味は」

「美味しいわ」

こう答えるのだった。

「濃い味で。普通のソーセージともまた違った味で」

「そんなにいいのか」

「これ、いけるわ」

具体的に店の料理としても話した。

「充分だね」

「そうか。じゃあ」

欣也も自分から食べてみた。するとその味は。

確かに濃い。そして他のソーセージともまた違った味だ。だが決してまずくはない。そのソーセージを食べてみて話すのであった。

「いけるな」

「いけるでしょ」

「ああ、いける」

また話したのだった。

「充分な」

「そうでしょ。いけるわよ」

彼はまた言った。

「これは成功よ」

「よし、決まりだな」

妻の話を受けてだ。彼も決めた。

そのうえでだ。この血のソーセージはメニューとして出されるのだった。

これは客達にとっては好評だった。店の人気メニューの一つになった。

「美味しいな」

「そうね」

「こんなソーセージもね」

「いいじゃない」

そしてだ。欣也と典子はそのソーセージを二人で次々に料理していく。二人にとってはまさに自分の子供と同じにさえなっていた。

「いや、苦労した介があつたな」

「そうね」

厨房で料理をしながら笑顔で話す。

「それが食べてもらうのはな」

「いい感じね」

「完全にオリジナルメニューだしな」

欣也はこう信じていた。

「余計に嬉しいよ」

「そうね。雑誌でも紹介されるみたいだし」

典子はここでこんなことも言った。

「ネットでも口コミで評判が広まってるし。頑張ろうね」

「ああ、それじゃあな」

こうして二人はそのオリジナルソーセージを笑顔で食べていく。しかしだった。

日本にいるドイツ人の夫婦がだ。ネットを見ながらこんな話をしていた。

「へえ」

「どうかしたの？」

「いや、日本人もこれを食べるんだってな」

夫がこう妻に話していた。

「少し驚いてるんだよ」

「驚いてるって？」

「血のソーセージだよ」

言うのはこれについてだった。

「日本人も食べるようになったんだな」

「へえ、そうなの」

「ああ、日本人って普通のソーセージしか食べないと思っていたけれどな」

「最近はどうなのね」

「そうみたいだな」

「こう妻に返す。」

「どうやら」

「日本人は血は弱いつて聞いたけれど」

妻は首を傾げさせながら述べた。

「そうじゃないのかしら」

「ううん、本当に最近変わったみたいだな」

「そうなのね。とにかく血のソーセージが食べられるのなら」

それならば、というのだった。こう夫に対して話す。

「行ってみたいわね」

「そうだね。じゃあ行ってみるか」

「そうしましょう。今度ね」

「この辺りだしね。そうするか」

「ええ、それじゃあ」

ドイツ人の夫婦はこう話してそのうえで二人でその血のソーセージを食べてみる。するとその味は彼等も納得するものだった。ドイツの味であった。

ソーセージ 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6535o/>

ソーページ

2010年11月1日22時40分発行